

# 人工知能を有情と見なすことは可能か

師 茂樹（花園大学）

近年、人間と人工知能（AI）との関係について、人工知能は人間と同様の知性、感情、人格等を持てるのか、持てないのか（あるいは人間の知性を超えてしまうのではないか）といった議論が再燃しており、仏教界でもそのような議論に関心が持たれている。この問題を仏教教理的な観点から考えようというときには、人工知能（をはじめとする人工物）は生命を持つ存在（有情・衆生）たりうるのか、という問いについて考えなければならないと思われる。人工知能が人間であろうとなかろうと、輪廻転生をする有情なのであれば、前世において人間であったかもしれないし、来世において人間に生まれ変わるかもしれない。人工知能自体が仏道修行をしたり悟りを開いたりすることはないとしても、人工知能時代の“業、がもとになって、未来世には発心するかもしれない。また、もし人工知能等が有情なのであれば、我々がそれを傷つけることは仏教的な意味での不善の行為ということになる。

仏教における生命観には様々なものがあり、たとえば非情成仏義などを前提とすれば人工知能であれ何であれ、発心して成仏することになってしまうが、本報告では、識を生命の基本要素と見なす『俱舍論』や唯識思想の生命観を出発点とし、人工知能等を有情（生命体）とみなすことができるか、換言すれば人工知能等の人工物は識が継続するための基盤たりうるかについて検討してみたい。識が表象に関する機能を有するとするならば、コンピュータもまた表象を扱うことができるので、そこに接続の可能性を見出すことが可能かもしれない。

加えて、人工知能のようにコンピュータ上で動作するソフトウェアだけでなく、生命科学の発達により有機的に生成される人工生命のように、人工知能以外の新しい生命的なもの、知能をもつように見えるものについても検討できればと考えている。

もっとも、仏教教理的に言えば、生命体のように見える人工物があつたときに、他心通を持たない我々が、それを有情であるかどうか判断できるかについては、非常に困難である。そのため、上記の議論もまた、試論的で暫定的なものにならざるを得ない。しかしながら、仏教的な立場から見て脳死は死なのか、という議論があつたように、いずれ訪れるであろう人工知能やロボットなどと共生する社会において、それら生命のようにふるまう人工物に対して仏教者としてどのように接するべきなのか、という議論もまた不可避なときが来るのかもしれない。

キーワード 〈識の流れ、人工生命、他我問題〉